SPOT スポット 2

岡崎城の築城　～家康…ではない!?～

え!?



伝　西郷頼嗣像　幸田町　正楽寺蔵

岡崎城の始祖　西郷頼嗣（さいごう　よりつぐ）

乙川の流路の付け替えから半世紀後、1452 年から 1455 年にかけて、明大寺（みょうだいじ）の地を拠点にしていた西郷弾正左衛門頼嗣（さいごう　だんじょうざえもん　よりつぐ）によって、乙川北側の台地上に城が築かれたとされます。これが岡崎城の始まりとされています。すなわち、この頼嗣（よりつぐ）こそ「初代岡崎城主」と言っても過言ではありません。

頼嗣（よりつぐ）の業績は、岡崎城築城に限りません。例えば、矢作川でも大事業を行います。当時、矢作川は氾濫を繰り返していた暴れ川でした。そこで、矢作川右岸（岡崎市北野町（きたのちょう）～矢作町（やはぎちょう）区間）に堤防を築くことで、暴れまわっていた川筋を固定化させたとされます。

ところで、頼嗣（よりつぐ）の時代、岡崎城はずっと小規模だったと考えられています。この小規模な岡崎城の北側に、「清海堀（せいかいぼり）」という、全国的に見ても変わった特徴を持った堀があります。

新発見の「腰巻石垣（こしまきいしがき）」！ 奥深い清海堀（せいかいぼり）、本来の姿



岡崎城図（水野家時代）岡崎市美術博物館蔵



清海堀を北西から見下ろす

※石垣は土塁を高くするための補強なので、一番守りたい本丸側に築かれるのが一般的です。

「清海堀（せいかいぼり）」は頼嗣（よりつぐ）の法名（ほうみょう）「西郷清海入道（さいごうせいかいにゅうどう）」に由来するとされます。この堀の特徴は、

①本丸に沿った美しい曲線

②石垣を正面から見ると、左右で積み方が異なる（＝積み直されている）

③本丸側が土塁（どるい）で反対側が石垣なこと

等が挙げられます。

令和元年にはこの堀の発掘調査が行われ、現在見えている約７ｍの深さの堀が、実はさらに２ｍ程深いことが分かりました。

また、絵図にも描かれていない「腰巻石垣（こしまきいしがき）」など新たな発見が相次ぎ、清海堀（せいかいぼり）本来の姿が少しずつ見えてきました。

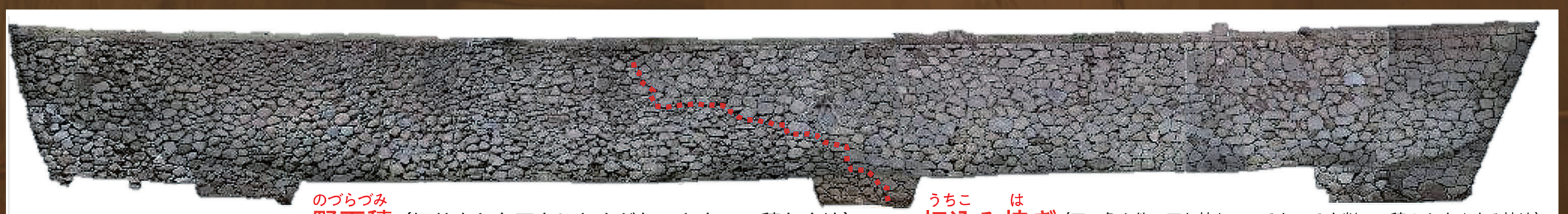


清海堀底面まで２ｍ以上埋まっていた



本丸側の斜面下で新たに発見された腰巻石垣

※腰巻石垣：土塁の下の方に築かれる石垣で、土塁の地滑りを防ぐ。反対に、土塁の上に築くのが鉢巻石垣。



野面積（のづらづみ）（切り出した石をほとんど加工しないで積む方法）

打込み接（うちこみは）ぎ（石の角や他の石と接しているところを削って積みやすくする技法）

清海堀北面石垣に見られる積直しの痕跡

※所蔵元の記載がない図は岡崎市教育委員会蔵

歴史と地形から、愛知を知る。ブラアイチ

SPOT スポット 2

岡崎の石工業（いしこうぎょう）　～意外な起源～



足利尊氏石宝塔



酒井広親石宝塔



田中吉政像　長浜城歴史博物館蔵

現代において八丁味噌と並び、岡崎の名産業となっている石工業。岡崎は良質な御影石（花崗岩）の産地であり、日本３大石品生産地の１つです。「石都岡崎」と呼ばれるほどに全国的な銘柄性を確立しています。

岡崎における紀年銘（製作年号などが彫られたもの）を残す石造物で最古のものは1358年銘の足利尊氏石宝塔（大門町）の他、1459年銘の酒井広親石宝塔（岩津町）などが存在します。こうした石造物を地元の職人が製作したのかは記録がなく不明ですが、いずれも岡崎で産出する花崗岩を使用していることから、地元で石材が産出すること自体はこの頃までにはすでに認識されていたものと考えられます。

石工業の起源

岡崎において石工業が盛り上がりをみせるのは、1600年以降です。その起源は少しだけ時代が遡り、田中吉政が和泉・摂津（現大阪府南西部・大阪府北中部、兵庫県南東部）から石工を招いて、堀や石垣などを築かせたことによるものと言われていますが、はっきりとした根拠や史料もなく、不確定とされています。

ただし、豊臣秀次の祐筆（文書や記録をとる人）、駒井の記録によると、田中は複数の穴太衆という石積み集団のスペシャリストを差配できる立場であったことが記されています。

実際、吉政自身、近江（現滋賀県）出身であり、穴太衆も同じく近江出身であることから、接点があったことは充分に考えられ、岡崎においても吉政の指示で穴太衆が活躍した可能性があります。

こうした石工のスペシャリスト達の活躍、技術の継承、南北の矢作川舟運・東西の東海道といった発達した水陸交通による運搬の便の良さにより、現代まで石工業は発展を続けていきました。

天守台石垣をよく見ると「鏡石」という巨石が３石用いられています。鏡石は本来、大手門などお城に入ってすぐの目立つ場所に置かれて「わが城はこれほどの巨石を用いる力があるぞ！」と、力を誇示するためのものですが、これを吉政は天守台に用いました。鏡石は「鏡」のように厚みが薄いため、巨大な天守の土台に用いるのは考えられない発想でした。

400年倒れずに残るこの巨石には、田中吉政という人物の、築城技術への自信が現れているようです。



天守台石垣北面　階段の奥に立つ鏡石



天守台石垣南面　１期は岡崎城内最古の田中期に築かれた石垣

※所蔵元の記載がない図は岡崎市教育委員会蔵